



TITLE:

「文心雕龍」事類篇笱記

AUTHOR(S):

幸福, 香織

CITATION:

幸福, 香織. 「文心雕龍」事類篇笱記. 中國文學報 1996, 52: 37-46

ISSUE DATE:

1996-04

URL:

<https://doi.org/10.14989/177607>

RIGHT:

『文心雕龍』事類篇劄記

幸 福 香 織

京都大學

六朝後期に成立した劉勰の『文心雕龍』は、文學理論の書として重要であるばかりでなく、漢魏の多くの佚文の斷片を記録する貴重な資料でもある。だが、残念なことに、出典が不詳であるため、前後の文脈がつかめず、文意がはっきりしないところも少なくない。こうした不詳、未詳箇所、文意が明らかになれば、今後の研究に資するところは大きいだろう。ここではわずかであるが、出典不詳部分のひとつ、事類篇所引の魏武帝曹操のことばに現れる人名について、若干の考察を試みたい。

事類篇は學問の重視と、學問の基礎の上に立った的確な典故の運用を説く一篇で、中に次のような曹操のことばを

『文心雕龍』事類篇劄記（幸福）

引用する。

故に魏武稱すらく、「張子の文を拙と爲す。然うして學問膚淺にして見る所博からず、専ら崔・杜の小文を拾掇す。作る所悉くは難ずべからず、難は便ち出づる所を知らざること」と。斯れ則ち寡聞の病なり。⁽¹⁾

故魏武稱「張子之文爲拙。然學問膚淺、所見不博、專拾掇崔杜小文。所作不可悉難、難便不知所出。」斯則寡聞之病也。

（『文心雕龍』事類篇）

曹操のことばの出典は不詳。後に「寡文の病」ということから、學識不足を批判するための引話であることは明らかだが、「張子」「崔杜」の人名が不明であるために、具體的な批判の意圖がわかりにくい。これまでの注釋では、この三名の人名について、すべてを不詳とするもの、「張子」を不詳とし「崔杜」を後漢の崔駰崔瑗父子・杜篤とするもの、また「杜」については杜篤のほか、杜林、杜毅をあげるものもあり、さまざまに意見が分かれる。⁽²⁾ 今、比較的踏襲されていると思われる楊明照『文心雕龍校注拾遺』の見

解を次にあげる。⁽³⁾

「張子」は張範ではなからうか。『邴原別傳』に「河内の張範、名公の子なり。其の志行(邴)原と符する有りて、甚だ相い親近す。⁽⁴⁾ (曹操) 令して曰く、「邴原名は高く徳は大、清規世に逸かに、魁然として峙し、孤が用と爲らず。聞くならく張子は頗る之に學ばんと欲す。吾れ之に造る者は富み、之に隨う者は貧するを恐るるなり。」(三國志魏志邴原傳裴注引) という。……

崔駰父子および杜篤には皆な雜文が有り、嚴可均全後漢文卷二八又た卷四四至卷四七に見える。

按『張子』未審爲張範否? 邴原別傳『河内張範、名公之子也。其志行有與(邴)原符、甚相親近。⁽⁵⁾ (曹操) 令曰、「邴原名高德大、清規逸世、魁然而峙、不爲孤用。聞張子頗欲學之。吾恐造之者富、隨之者貧也。』(三國志魏志邴原傳裴注引)……按崔駰父子及杜篤皆有雜文、見嚴可均全後漢文卷二八又卷四四至卷四七。

(楊明照『文心雕龍校注拾遺』)

楊氏は「張子」を張範、「崔杜」を崔駰崔瑗および杜篤

と考える。確かに、崔駰(?~九二)崔瑗(七七~一四二)父子および杜篤(?~九二)は、活躍した時代も近く、またそれぞれ文名が高い。『後漢書』の傳にはそれぞれ次のように記されている。

年十三にして能く詩、易、春秋に通ぜり。博學にして偉才有り。盡く古今の訓詁、百家の言に通じ、善く文を屬る。少くして太學に遊び、班固・傅毅と同時に名を齊しうす。

年十三能通詩、易、春秋、博學有偉才、盡通古今訓詁百家言、善屬文。少游太學、與班固傅毅同時齊名。

(『後漢書』卷五十二崔駰傳)

瑗 文辭に高く、尤も書、記、箴、銘を爲るを善くし、著す所の賦、碑、銘、箴、頌、七蘇、南陽文學官志、歎辭、移社文、悔祈、草書訣、七言、凡そ五十七篇。其の南陽文學官志は後世に稱せられ、諸の能く文を爲る者皆な自ら以えらく及ぶ弗しと。

瑗高於文辭、尤善爲書、記、箴、銘、所著賦、碑、銘、箴、頌、七蘇、南陽文學官志、歎辭、移社文、悔祈、

草書執、七言、凡五十七篇。其南陽文學官志稱於後世、諸能爲文者皆自以弗及。

〔後漢書〕卷五十二崔瑗傳

篤 少くして博學にして、小節を修めず、郷人の禮する所と爲らず。……大司馬吳漢の薨するに會し、光武詔して諸儒に之を誄せしむ。篤 獄中に誄を爲り、辭は最も高く、帝 之を美め、帛を賜い刑を免ず。篤少博學、不修小節、不爲郷人所禮。……會大司馬吳漢薨、光武詔諸儒誄之、篤於獄中爲誄、辭最高、帝美之、賜帛免刑。

〔後漢書〕卷八十上文苑傳杜篤

また『文心雕龍』才略篇に、
傳毅・崔駰は、光采肩を比べ、瑗・寔は武を踵いで、
能く厥の風を世よにする者なり。杜篤・賈逵も、亦た
文に聲有るも、其の才爲るを跡くるに、崔・傳の末流
なり。

傳毅崔駰、光采比肩、瑗寔踵武、能世厥風者矣。杜篤賈逵亦有聲於文、迹其爲才、崔傳之末流也。

『文心雕龍』事類篇割記（幸福）

とあり、並稱はしていないものの、一つの流れの中で崔駰、崔瑗、杜篤をとらえている。作風に何らかの共通點が認められていたものであろう。陸侃如・牟世金『文心雕龍譯注』も、「崔杜」を不詳としながら、「曹操の前、崔杜二姓の同時代の文人に、後漢の崔駰・杜篤がいる」と、この二名の名をあげる。しかし、同時代性、文學における名聲、作風の共通點という條件を備えながら、なお「崔杜」並稱を推定するに十分でない。並稱を推定するためには、才能が拮抗すると考えられていること、そしてその並稱の形が固定して襲用されることが必要と思われる。上述の資料から見れば、崔駰は班固・傳毅と、杜篤は賈逵とこそ並稱されるべきで、崔駰崔瑗父子と杜篤を「崔杜」と呼ぶ必然性、または具體的な前例がない。

「張子」の推定はさらに曖昧である。楊氏の注釋は、三國魏の時代、曹操の周邊に「張子」と呼ばれる張範が存在したことを證明しているが、しかしこの張範が「崔杜」と結びつく必然性が示されていない。『文心雕龍』の原文には「張子」が「崔杜」の小文を拾掇したとある。「子」を

敬稱と考えるならば、張某の推定には、曹操が「張子」と呼んだという記事よりも、むしろ「崔杜」との結びつきをこそ重要視する必要があるだろう。以上のような楊説の検討を通して、「張子」および「崔杜」を推定するための必要條件がほぼ明らかになったと思う。そこでここでは、「崔」と「杜」の並稱、および「張子」と「崔杜」の結びつきを重視して、検討を始めることにしたい。

まず「崔」と「杜」の並稱から考えよう。文學というジャンルの中では「崔杜」の並稱は見あたらないが、文學以外に眼を向ければ、曹操より後の後漢中期の人物に、「崔杜」あるいは「杜崔」と並稱される崔氏と杜氏がいる。

羅叔景・趙元嗣なる者、伯英と時を並べ、西州に稱せられ、巧を矜りて自與し、衆頗る之に惑う。故に英自ら稱すらく「上は崔杜に比ぶれば足らず、下は羅趙に方ぶれば餘り有り。」と。

羅叔景趙元嗣者、與伯英並時、見稱於西州、而矜巧自與、衆頗惑之。故英自稱「上比崔杜不足、下方羅趙有餘。」

(衛恒「四體書勢」『晉書』卷三十六引)

右は西晉の能書家衛恒の「四體書勢」の一文である。「四體書勢」は古文・篆書・隸書・草書の四つの書體を論述した文章で、ここに引用した部分は、能書家を列挙しながら草書の沿革を略述する段に見える。羅叔景は羅暉、字は叔景。趙元嗣は趙襲、字は元嗣。ともに後漢後期の能書家で、彼らの草書は一時代を風靡した。これを善しとしなかったのが、同じ時代の草書の達人張芝、字は伯英。「臨池學書」の故事で知られ、草聖とも筆聖とも稱されたという。⁽⁶⁾張芝は自らの書を「崔杜」には及ばないが、羅趙よりは優れる」といい、羅暉・趙襲の書を批判したという。ここに「崔杜」の並稱が見える。この「上比崔杜不足、下方羅趙有餘。」の語は相當長く長く流布したと思われ、論書の著作に散見する。劉宋の能書家、羊欣は、おそらく衛恒「四體書勢」を襲って羅暉・趙襲について次のようにいう。

羅暉・趙襲、何許の人かを詳らかにせず。伯英と時を同じくし、西州に稱せらる。而して矜許自與、衆頗る之に惑う。伯英 朱寬に書を與え自ら敘して云えら

く、「上は崔、杜に比ぶれば足らず、下は羅趙に方ぶれば餘り有り」と。

羅暉趙襲、不詳何許人。與伯英同時、見稱西州。而矜許自與、衆頗惑之。伯英與朱寬書自敘云、「上比崔、杜不足、下方羅趙有餘。」

（羊欣「古來能書人名」「法書要錄」卷一）

「古來能書人名」は古來の能書家六十九人について、官名・出身地・書評をそれぞれ列舉したもので、右は羅暉と趙襲についての記事。また次は『後漢書』趙岐傳附趙襲傳の注に引く『三輔決錄』の記事で、ここでは「崔杜」の字が明記されている。

是に先んじて杜伯度・崔子玉 草書に工みなを以て前代に稱せられ、（趙）襲と羅暉とは書に拙く、張伯英に蚩^ちわる。英頗る自ら矜高にして、朱賜に與うる書に云えらく「上は崔、杜に比ぶれば足らず、下は羅趙に方ぶれば餘り有るなり。」と。

先是杜伯度崔子玉以工草書稱于前代、（趙）襲與羅暉拙書、見蚩於張伯英。英頗自矜高、與朱賜書云「上比

『文心雕龍』事類篇劄記（幸福）

崔、杜不足、下方羅趙有餘也。」

（『後漢書』卷六十四趙岐傳注引『三輔決錄』）

文頭の「是」は趙襲を指す。伯度・子玉はそれぞれ杜度・崔瑗の字。杜度の生卒年は不詳であるが、後漢の章帝の頃に活躍したとい^わう。このように、曹操より前、後漢中期の人物に「崔杜」と固定して襲用される二人が確かに存在する以上、まず崔瑗・杜度をこの並稱の第一の候補と考えようと思われる。

杜度は草書において名を知られる初めての人で、崔瑗は杜度よりやや遅れるが、おそらく二人の草書の才能は拮抗しており、また書風は對照的であつた。というのは、梁の庾肩吾『書品』が杜度・崔瑗とともに上中品に配しており、また齊の王僧虔が二人の書風を比較して次のようにいうからである。

昔 杜度は殺字甚だ安らかにして、筆體微や瘦たり。崔瑗は筆勢甚だ快にして、結字小や疏^やたり。

昔杜度殺字甚安而筆體微瘦。崔瑗筆勢甚快而結字小疏。

（王僧虔「論書」「法書要錄」卷一）

崔瑗・杜度は、活躍した時代が近く、「崔杜」並稱の前例があり、しかも才能は同程度、書風は對置して比較されている。このような條件から「崔杜」並稱の候補として崔瑗・杜度が有力であることを確認して、次に「崔杜」と結びつく「張子」を採すことにしたい。先に引用した衛恆「四體書勢」は、草書の歴史について冒頭に次のように語る。

漢興りて草書有るも、作者の姓名を知らず。章帝の時に至り、齊相杜度善く篇を作ると號す。後に崔瑗・崔寔有りて、亦た皆な工みと稱す。杜氏は殺字甚だ安らかにして、書體は微や瘦たり。崔氏は甚だ筆勢を得るも、結字は小や疏たり。弘農の張伯英は、因りて轉た精にして甚だ巧みなり。凡そ家の衣帛は、必ず書して後に之を練る。池に臨みて書を學び、池水盡く黒し。漢興而有草書、不知作者姓名。至章帝時、齊相杜度號善作篇。後有崔瑗崔寔、亦皆稱工。杜氏殺字甚安、而書體微瘦。崔氏甚得筆勢、而結字小疏。弘農張伯英者、因而轉精甚巧。凡家之衣帛、必書而後練之。臨池學書、池水盡黒。

この記述によれば、杜度・崔瑗の後、二人の書風をさらに精巧に發展させたのが張芝と考えられる。また次の二例も崔杜と張芝の密接な結びつきを語ってくれる。

（張芝）尤も草書を好み、崔杜の法を學び、家の衣帛、必ず書して後に練る。

（張芝）尤好草書、學崔杜之法、家之衣帛、必書而後練。

（『後漢書』卷六十五張奐傳注引王愷「文字志」）

崔杜の後、共に張芝を推し、仲將之を筆聖と謂う。

崔杜之後、共推張芝、仲將謂之筆聖。

（王僧虔「論書」『法書要錄』卷一）

仲將は能書で知られる魏の韋誕の字。ここに「筆聖」と言われるように、張芝は崔瑗・杜度よりも高く評價されたようだ。梁の庾肩吾『書品』は、張芝を魏の鍾繇・東晉の王羲之と並べて最高の上品に配している。以上の用例から「崔杜」を崔瑗・杜度とするならば、これと密接に関わる「張子」とは張芝でないかと推定される。

そしてこの推定をさらに強固にするのが、次にあげる後漢の趙壹の「非草書」である。「非草書」は後漢末期の草

書の流行を戒めるために書かれたもので、草書に熱中する當世の輩を批判して次のようにいう。

夫れ杜崔張子は、皆な超俗絶世の才有り、博學の餘暇に、手を斯に遊ばす。後世焉を慕い、専ら用て務めと爲し、鑽れば堅く仰げば高く、其の罷勞を忘れ、夕べに惕しんで息まず、仄かたむくも食するに暇あらず。

夫杜崔張子、皆有超俗絶世之才、博學餘暇、遊手于斯。後世慕焉、專用爲務、鑽堅仰高、忘其罷勞、夕惕不息、仄不暇食。

（趙壹「非草書」「法書要錄」卷一）

趙壹の生卒年は明らかでないが、光和元年（一七八）に郡の上計に擧げられたというから、曹操（一五五～二一〇）とほぼ同時代を生きたと考えられる。右の一段は「杜崔張子」は學問を先にし、その餘暇に草書に手を遊ばせたのに對し、當世の輩は草書を専ら務めとする、とその心得ちがいを批判するものである。趙壹より前、草書に傑出する「杜崔張子」とは誰か。これまでの考察から、これが杜度・崔瑗・張芝を指すことは明らかだろう。

『文心雕龍』事類篇劄記（幸福）

「非草書」の文中には「杜崔張子」の姓名を記さないが、これはおそらく周知の人名であったためで、次の一段から「杜崔」が杜度・崔瑗を指し、「張子」が張芝をいうことが知られる。

竊かに有道張君の朱使君に與うる所の書を覽るに、稱すらく正氣は以て邪を銷す可く、人に其の疊無くんば、妖は自ずから作らずと。誠に道を信じ眞を抱き、命を知り天を楽しむ者と謂う可きなり。夫の杜崔を褒め、羅趙を沮はみ、欣欣として自ら臧たとするの意有る者の若きは、乃ち伎を矜り、彼を賤しみ我を貴ぶに近き無らん哉。

竊覽有道張君所與朱使君書、稱正氣可以銷邪、人無其疊、妖不自作、誠可意信道抱眞、知命樂天者也。若夫褒杜崔、沮羅趙、欣欣有自臧之意者、無乃近於矜伎、賤彼貴我哉。

（趙壹「非草書」「法書要錄」卷一）

「有道」は張芝の號で「有道張君」は張芝を指す。⁽⁹⁾張芝から「朱使君」への書簡とは「上比崔杜不足、下方羅趙有

餘也。」といつて羅暉・趙襲を笑つたという件の書簡。したがつて「杜崔を褒め、羅趙を沮み、欣欣として自ら感しとするの意有る者」は、「上比崔杜不足、下方羅趙有餘也。」という表現を批判するもので、この「杜崔」が杜度・崔瑗を指し、先に引用の部分で「杜崔」と並び稱される張子が張芝を指すことは明らかである。

これまで検討してきたところをまとめれば、

(1) 後漢中期の杜度・崔瑗は草書の才能においてほぼ對等と評價されており、その書風は對照的、「杜崔」あるいは「崔杜」という並稱が固定して襲用されている。

(2) 杜度・崔瑗とつながる張姓に張芝がいる。張芝は杜度、崔瑗の書風を學び、精巧なものへと發展させて、草書を發展させたといわれる。

(3) 曹操とは同時代の趙壹がその「非草書」において杜度・崔瑗・張芝を指して「杜崔張子」と呼んでいる。

さらにもうひとつ、

(4) 『文心雕龍』事類篇の曹操の語に、「張子」が「専ら崔杜の小文を拾掇し」というが、これは「尤も草書を

好み、崔杜の法を學」(『後漢書』卷六十五張奐傳注引王愷「文字志」)んだという張芝の記載と關連すると思われることを傍證としてあげておきたい。草書において張芝が崔杜を學んで功あつたと評價されるのに對し、曹操はその文章創作の面に注目して、「張芝の文は短い斷片的な文章の寄せ集めにすぎない」と批判したものと思われる。以上の四點から、『文心雕龍』事類篇の「張子」「崔杜」を張芝、崔瑗・杜度とする推定はかなり確實な、蓋然性の高いものであると思う。

これまでの注釋がこの三名を推定しなかったのは、おそらく、文學史の範疇から、「崔杜」を特定したためと思われる。しかし、こういった人名の推定の際に、文學・書學というジャンルの區分の必要はないだろう。書論に見える「上比崔杜不足、下方羅趙有餘也。」が、變型されて、

陳思に方ぶれば足らず、魏文に比ぶれば餘り有り。

方陳思不足、比魏文有餘。

(鍾嶸『詩品』上品王粲評)

と、文學批評の書『詩品』に使われていることは、書き

手・読み手の雙方が、書學も文學も含めた共通の廣い教養の基盤の上に立っていたことを示す一端と思われる。能書あるいは書美への關心が、後漢以後、六朝を通じてどのようにな文人の間に意識され、その價值が上昇していくかは今後の課題としたい大きな問題であるが、少なくともこの『文心雕龍』の一段には、劉勰の書藝に對する批判が讀み取れるものと思う。「寡聞の病」の一例として、「草聖」と稱された張芝をあげて批判する背後には、彼を慕って書藝に熱をあげる、劉勰と同時代の輩への痛烈な批判が込められていたのではなからうか。劉勰の批判の背景には、文章創作論にとって批判さるべき現狀が横たわっていたと想像されるのである。

* * *

本稿は一九九四年十月九日日本中國學會における口頭發表の一部を加筆したものである。學會發表後、多くの方から貴重なご意見、ご批判をいただいた。感謝を込めてここに付記したい。

『文心雕龍』事類篇割記（幸福）

注

（一九九六年二月二十七日）

(1) 訓讀は興膳宏『文心雕龍』（筑摩書房、一九六八年十二月）による。以下同じ。

(2) すべてを不詳とするものは、興膳宏『文心雕龍』（筑摩書房、一九六八年十二月）、陸侃如・牟世金『文心雕龍譯注』（齊魯書社、一九八二年九月）、向長清『文心雕龍淺釋』（吉林人民出版社、一九八四年三月）など。周振甫『文心雕龍今釋』（中華書局、一九八六年十二月）は「張子」を不詳とし、「崔杜」には崔駰父子および杜篤とする楊明照注を引く。疑問を残しながら「張子」に張範をあげ、「崔杜」に崔駰父子を比定するのは、文中に引用した楊明照氏の注釋。また、鍾韜・黃安順『劉勰寫作之道』（長征出版社、一九八四年八月）は「張子」を不詳とし「崔杜」を崔駰・杜毅とする。趙仲邑『文心雕龍譯注』（漓江出版社、一九八三年三月、初版は一九八二年四月）は「張子」を張範とし「崔杜」を崔駰・杜林とする。

(3) 楊明照『文心雕龍校注拾遺』（上海古籍出版社、一九八二年十二月）二九五—六頁。

(4) 百衲本、中華書局本ともに「甚相親敬」に作る。

(5) 陸侃如・牟世金『文心雕龍譯注』（齊魯書社、一九八二年九月）二二七頁「崔、杜：所指不詳。曹操之前、崔、杜二姓同時文人東漢崔駰、杜篤。」

- (6) 劉宋の羊欣「古來能書人名」(『法書要錄』卷一)に、張芝をあげて「弘農張芝、高尚不仕、善草書、精勁絕倫。家之衣帛、必先書而後練、臨池學書、池水盡墨。每書云「勿勿不暇草書」、人謂爲「草聖」。」という。また後述するように、齊の王僧虔「論書」(『法書要錄』卷一)に、「崔杜之後、共推張芝、仲將謂之筆聖。」という。
- (7) 衛恆「四體書勢」に「漢興而有草書、不知作者姓名。至章帝時、齊相杜度號善作篇。」という。
- (8) 『後漢書』卷八十下文苑傳趙壹傳。
- (9) 『後漢書』卷六十五張奐傳注引王愷「文字志」に「芝少持高操、以名臣子勲學、文爲儒宗、武爲將表。太尉辟、公車有道徵、皆不至、號張有道。」という。
- (10) 興膳宏『「詩品」と書畫論』(『日本中國學會報』第三十一集、一九七九年のち『中國の文學理論』筑摩書房、一九八八年九月二八八頁)に、『詩品』王粲評の「方陳思不足、比魏文有餘。」という表現が、書論の「上比崔杜不足、下方羅趙有餘也。」をもじった表現であることが指摘されている。